



TITLE:

Developing a Community Revitalization Movement Based on Reflective Dialog Using Engaged Ethnography(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Cahya, Widiyanto

CITATION:

Cahya, Widiyanto. Developing a Community Revitalization Movement Based on Reflective Dialog Using Engaged Ethnography. 京都大学, 2015, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2015-07-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r12952>

RIGHT:

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	Cahya Widiyanto
論文題目	Developing a Community Revitalization Movement Based on Reflective Dialog Using Engaged Ethnography （実践的エスノグラフィを用いた自省的対話によるコミュニティ活性化運動の促進）		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本学位論文は、高度経済成長の中、市場経済化の波が押し寄せ、コミュニティが弱体化しつつあるインドネシアの農村において、住民が主体性を取り戻し、コミュニティの伝統と絆を維持することを目的に、申請者が行ったアクションリサーチをまとめたものである。そのアクションリサーチでは、住民が現状を相対化し、新しい選択肢を見出すための自省的対話（reflective dialog）を促進する試みが、申請者のリーダーシップで展開される。また、本論文中で報告されるエスノグラフィは、単なる観察記録にとどまらず、自省的対話の貴重な資料として、住民との協同的实践の中で使用される実践的エスノグラフィ（engaged ethnography）として位置づけられる。</p> <p>本論文の概要は以下のとおりである。</p> <p>まず、第1章の前半では、先行研究のレビューを踏まえて、インドネシアにおける農業が単なる一産業を超えて、国民の精神的支柱を形成してきた歴史的背景、および、その農業を支えてきた農村コミュニティが経済成長・市場経済化の中で弱体化・崩壊の危機に瀕している現状が述べられている。また、この危機を克服するには、市場経済化を否定するのではなく、市場経済を創造的に利用しつつ、同時に、かつてのコミュニティを回復する（昔がえりをする）運動、すなわち、「創造的昔がえり（creative return to the past）」の運動が必要であることが主張されている。</p> <p>第1章の後半では、本研究の方法論に目を転じ、新しいナラティブの創出によって当事者のコミュニティに対する姿勢を変化させるナラティブ・アプローチの重要性が論じられている。とくに、申請者が記述するエスノグラフィを、当事者による新たなナラティブ創出の梃子にする、すなわち、実践的エスノグラフィを活用して自省的対話を促すという本研究の方法論的立場が明確に示されている。</p> <p>第2－3章は、2008－2013年の6年間にわたる申請者のアクションリサーチがエスノグラフィとして報告されている。そのフィールドは、インドネシア・ジャワ島ジョグジャカルタ市から約1時間の距離にあるダルマン（Daleman）地域である。同地域は、都市近郊に位置することもある市場経済化の影響を強く受けていた。短期的な収穫量を上げるために大量の化学肥料が使用され、農地の土質は著しく劣化していた。また、収穫米は安値で叩かれ、農民の生活は困窮を極め、離農者が後を絶たない現状にあった。</p> <p>第2章では、従前から緩やかな協力関係があった2つのコミュニティJodhog（以下J村）とNgirengireng（N村）において、コミュニティ活性化運動が開始されたプロセス（2008－2010年）が克明に描かれている。当初、住民は困窮する生活を、抗しがたい運命のように受容していた。しかし、申請者は、それまでの研究を基にしたドキュメンタリー映画をも使って、20年前までは生き生きとしていた農村が、市場経済化の波に翻弄された結果として現状に至ったこと、また、市場経済に前向きに挑戦していくには、コミュニティの団結が重要であることを、住民に力説した。住民の中に理解者が現れ、J村、N村それぞれのリーダーも立ち上がり、両村が連携して活性化運動ビジョンの模索が始まった。模索の過程では、申請者の努力で、古き良き時代を知る高齢者のナラティブ、また、農村活性化の経験豊富な専門家のナラティブが、住民たち</p>			

に共有されるようになった。その結果として、かつては当たり前に行われていた有機農法を活性化の軸とすることに意見が収斂していった。そこには、有機農法と表裏一体である濃密な人間関係や、伝統文化をも復活させようとする意図もあった。

自然農法を軸とした活性化は一定程度の成果を収めたが、予期せぬ困難が待ち構えていた。第3章では、2つの村の間に生じた亀裂と、その修復の過程（2010－2013年）が述べられている。有機農法は、貴重な成功事例として全国的な評価を受けるまでになったが、その利益配分を巡ってJ村とN村の間に対立が生じた。対立は、申請者らの粘り強い努力にもかかわらず約2年間続いた。その2年間に、N村では有機農法に加えてキノコ栽培の試行錯誤が行われ、ある程度の成功を収めたが、ふとしたことから、キノコ栽培をJ村と共同で行ってはどうか、という提案がN村の一人からなされた。しかし、一旦生じた両村の溝はなかなか修復できなかった。そこで使用されたのが、本論文第2章のエスノグラフィ、すなわち、両村が団結し、共通の目標（有機農法）を見出すに至ったプロセスの記述だった。「どうすれば、あの時のようなことができるのか」―― これを巡って徹底的な議論が交わされた。「あの時」も、決してスムーズに協力関係が形成されたわけではなかった。「あの時」の細かなプロセスを模造紙に図示し、自分たちが遭遇した困難とその克服を分析（自省）する中で、再結集への具体的方策が浮上してきた。

第4章では、第1章の視点に立ち戻って、第2－3章のアクションリサーチを理論的に位置づけている。具体的には、アクションリサーチにおいて研究者が果たすべき役割は、現場のナラティブを変容させることであり、そのためにエスノグラフィは実践的なツールになりうること、また、「創造的昔がえり」は、コミュニティのビジョンを構想する上で極めて有効な概念ではあるが、同時に、その道のりは決して平たんではなく、時として対立という、そこで挫折しても不思議ではないフェーズをも含むことが論じられている。

(論文審査の結果の要旨)

本学位論文は、経済成長著しいインドネシアにあって疲弊しつつある農村コミュニティをいかにして再生するかという実践的問題に、実践的エスノグラフィという方法、および、「創造的昔がえり」という概念を軸に取り組んだアクションリサーチをまとめたものである。本研究には、以下のような評価すべき特徴がある。

第1の特徴は、6年間という長期にわたるフィールドワークを行い、住民との濃密な信頼関係を構築しながらアクションリサーチを展開した点にある。本論文の中には、そのような濃密な関係があったればこそ遭遇しえた多くの具体的な経験が散りばめられている。とりわけ、活性化運動の開始当初には想像もできなかった2つのコミュニティの対立に関する記述は、極めて興味深い。対立のさなかにおいては、申請者も含めて方向性の見えない暗中模索が続くが、本論文には、その渦中の申請者が、まさに一人称的にリアルに記述されている。このような記述は、多くのコミュニティ活性化が、その道のりのどこかで対立と遭遇することを考えれば、他のコミュニティに対して重要なメッセージ性を有していると考えられる。

第2の特徴は、エスノグラフィという手法を、当事者との協同的实践の一部、すなわち、当事者たちの自省に供するものとして活用した点である。エスノグラフィは、文化人類学、社会学、経営学等をはじめ多くの分野で使用される質的研究手法である。しかし、量的研究法に代わる質的研究法としてのエスノグラフィを超えて、アクションリサーチを推進する実践の道具としてエスノグラフィを位置づける研究は、まだ数少ない。

そもそも、本研究では、研究者（申請者）も住民と並ぶ一参加者であるという姿勢が貫かれていると同時に、研究者としての参加の仕方が厳しく自問自答されている。その結果、申請者がとった立場こそ、「現場の言説空間を豊かにする」という立場であった。その根拠は、「われわれが、言説によって思考し、言説によってコミュニケーションするがゆえに、言説空間を豊かにすることは、思考やコミュニケーションを豊かにするはずだ」というものである。本研究における実践的エスノグラフィは、このような立場を先鋭化したものとして高く評価できる。

第3の特徴は、コミュニティを活性化・変革していく駆動的概念として、「創造的昔がえり」を主張している点にある。日本の戦後史を振り返れば、1960-70年代の高度経済成長によって物質的豊かさを獲得した半面、自然環境、コミュニティの絆など、貴重な資産を犠牲にしてきた。そして、今、それらを取り戻そうという運動が、多くのコミュニティで展開されている。それらの運動は、ある意味で戦前、あるいは、高度経済成長以前への「昔がえり」を意図したものであるが、当然のことながら、時計は逆には進まない。単なる昔がえりは不可能であり、高度化した市場経済や科学技術を活用した創造性を発揮して昔がえりを行うこと、すなわち、創造的昔がえりが必要である。

上記と同じことが、10年後には経済的に日本に追いつくと予想されるインドネシアにも、そのまま当てはまる。さらに言えば、インドネシアのような発展途上国では、

アジアで初めて経済大国を実現した日本の教訓を活かすことが望まれる。その意味で、農村コミュニティを、その伝統的文化とともに維持しようとする本研究の実践は、急速な発展途上にあるアジア諸国にも大きな示唆をあたえるものと考えられる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年5月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 年 月 日以降